



## 飛驒の花もち

金丸弘美  
食総合プロデューサー

岐阜県高山市丹生川にゅうかわの山間地から、毎年、届くのがお正月に飾る「飛驒の花もち」。農家が山に入り枝ぶりのいい切り株を探しだし、枝に搗ぎたての餅で花のように飾り付けた「花餅」。紅白の餅が春の桃のようで可愛らしい。

飛驒地方の冬は雪が多く正月に生ける花もないことから、「花もち」で部屋を明るく彩り、子供たちを喜ばせ、豊穰ほうじょうを祈って、座敷天井下の横柱に取り付けるのだそう。

贈ってくださるのは農家の若林定夫さん。必ずお手紙がついている。それには「全国津々浦々花もちが飾られた日本を夢見て40年」とある。若林さんが32歳のときから始まった。「飛驒の花もち

組合」を作り仲間の中野さんと二人で手掛けてきた。11月末になると餅をついてくれる人に声を掛け近所の多くの女性たちが集まり「花もち」づくりをする。

若林さん一家は「花もち」用にもち米も栽培している。

地元で2000個近くの「花もち」が売られ、県外にも名古屋、大阪、東京など花市場を経由し300個くらいは出ているという。

若林さんと知り合ったのは2008年。大きなヘチマのような形をした「宿籬すくなかぼちゃ」を東京に売り出したいと高山市役所の方と二人でお見えになった。そこから3年間、一緒に過ごしていたのだが、若林さんの地域の方々の信頼の厚さ、行動力の素晴らしさ、実現力の力に目を見張った。

カボチャは多くの品種がある。そこで「宿籬かぼちゃ」を理解してもらうために、履歴、品種、特徴、栄養価、食べ方までテキストを作成していただいた。東京では3か所で料理会を開いた。江上料理学院ではバイヤーとマスコミ向けに。当時、代官山にあった『イータリー』では一般の方たちに。それぞれ対象を絞り、かぼちゃの素材から料理、生産者までを紹介することをした。

経堂きやうどうの生協のキッチン付き教室では会員さん



「飛驒の花もち」。枝には柳が使われている

向けに料理家の馬場香織さんにカボチャ料理をパ  
イ、サラダ、キッシュ、和え物など10品目以上を  
作っていただきお披露目した。

これを観た若林さんが「この料理を地元のかあ  
ちゃんたちと一緒に作りたい。けど予算がない」。  
「入場料をとればいいじゃないですか」と私。  
「なるほど」と若林さん。

高山市とJAとの協力で、キッチンを借り切り、  
入場料を集め、馬場香織さん呼び、地元のお母  
さんたちが参加し料理を披露する公開ワークショ  
ップを形にしてくださいました。せいろ蒸し、そぼろ  
餡、グラタン、シフォンケーキ、コロツケなど、  
カボチャ料理が30品目以上登場した。試食会には、  
地元の新聞や雑誌、議員さん、飲食店、関係者な  
ど100名近くを集めてくださり大盛況。

翌日、若林さんが高山市の町を案内してくださ  
った。するとあちこちから若林さんに声がかかる。  
「新聞でみたよ」。料理会の噂は一気に市内に広が  
っていたのだ。

翌年。今度は、高山市内のホテルや料理店での  
カボチャ料理の集いと披露が行われた。



長さ50センチ以上、重さ3キロ以上になる「宿儺かぼちゃ」

ホテルでは農  
家と関係者の集  
まりだった。参  
加者に銘々膳  
が置かれている。  
景品も並んで  
いる。若林さん  
がおもむろに広  
間の中央で、背  
広の上着を脱い  
で、それを畳の  
上で引つ張り始  
めた。

「これ、なんに見える」と若林さん。  
「地引綱」なんて答えが会場から出る。  
すると若林さん「服引いとるやろ。これから福  
引や」。

次に干し柿が配られ「なかを開けてみて」  
干し柿を割ってみると、種がないもの、一つだ  
け、二つあるものなど、いろいろある。なにもな  
いのは「はずれ」。入っているものに、それぞれ  
景品がある。

さらに翌年。「高山市は景観が素晴らしい。東  
京に売り出すよりツアーを組んで外の人に高山の  
暮らしと文化を紹介したほうが訴求力が高い」と  
提案したら、農家のみなさんに声をかけて実現し  
てくださった。古民家を改修した宿を貸し切り、  
銘々膳でカボチャ料理を出す。神社の祭りや、出  
荷場まで巡るツアー。

その翌年は築150年の古民家で農家さん総出  
でもてなし料理。それぞれ全国から20名近くが  
参加した。そのとき参加の皆さんに、あみだくじ  
を引いてもらった。当たりには生産者の名前があ  
る。引いた人は、宅急便の伝票が渡され、それぞ  
れのくじの当たりの農家から季節の米や野菜など  
が届くという趣向。

その素敵な演出に感心し「若林さん、若い頃、  
そうとう遊びましたね」と言う。「そんなことな  
い。真面目にやっとなつたわ」との返事。

こんな洒落つ気のある若林さんは、粋な遊びを  
した人に違いない。  
「花もち」が送られてくる度に、高山市の「宿儺  
かぼちゃ」一つで、さまざまな高山の素敵な人や  
暮らし風情を結びつけくださった情景が仔細にく  
つきりと浮かびあがるのである。  
そして若林さんが声をかけた「宿儺かぼちゃの  
会」は、20周年を迎えたという。